

自然遊学館 だより

2002 秋号 (No.25)

2002.10.1

二色の浜稚魚放流

2002 年 6 月 22 日第 7 回稚魚放流では、今年も大阪府栽培漁業センターのご好意により 10cm~15cm のヒラメの稚魚を 500 匹用意していただきました。水産試験場の睦谷主任研究員には稚魚の準備・運搬・設営といつもお世話をかけています。子どもたちは、この行事初参加の吉道貝塚市長から稚魚をバケツに入れてもらい、水際で一緒に並んで放流し、うれしそうでした。

参加者は 110 名でした。

(白木 江都子)

千石荘の昆虫採集

オオキンカメムシもいるかな？

2002 年 7 月 6 日、竹本卓哉氏を講師に迎え、毎年恒例で好評の千石荘での昆虫採集が行われました。もちろん主役の 1 種でもあるオオキンカメムシの調査も行いました。

まず千石荘病院の入口バス停付近で集合し、親子あわせて 52 名が参加しました。天気も良くかなり暑くなりましたが、みんなは昆虫採集ができるとあって元気いっぱいでした。千石荘病院の前の道を歩いて道路の突き当たりにあるシナアブラギリにオオキンカメムシがいるかどうか調べましたが、残念

ながら確認できませんでした。子どもたちはやっぱりカブトムシの方が好きなのでしょう、その付近の腐葉土にいたカブトムシを採集していました。これより奥の里山的環境になっているところではいるはずだ、と皆はオオキンカメムシのいるシナアブラギリを目指しました。

やはり暑かったのでしょうか、シナアブラギリには数個体のオオキンカメムシしか確認されませんでした。竹本先生によると、オオキンカメムシは越冬のために遠くから移動をしており、千石荘では毎年確認されているものの、本来のエサ資源であるアブラギリよりもシナアブラギリの生育が速いため、エサ資源として利用できなくなり、越冬ができないと説明がありました。将来的には貝塚でオオキンカメムシも越冬できるようになるかも知れません。

それでは、オオキンカメムシ以外に確認された昆虫を以下に示します。

アオモンイトトンボ、キイトトンボ、ベニイトトンボ、モノサシトンボ、ネアカヨシヤンマ、チョウトンボ、ウスバキトンボ、マユタテアカネ、ノシメトンボ、ショウリョウバッタ、ツチイナゴ、ケブカカスミカメ、アカスジカスミカメ、イトカメムシ、メダカナガカメムシ、オオメカメムシ、オオモンシロナ

ガカメムシ、オオホシカメムシ、ハラビロヘリカメムシ、ホシハラビロヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、マルカメムシ、ナガメ、シラホシカメムシ、チャバネアオカメムシ、コクワガタ、ヒラタクワガタ、ナミテントウ、ナナホシテントウ、キマワリ、クワカミキリ、オジロアシナガゾウムシ、コアオハナムグリ、アオスジアゲハ、モンキアゲハ、モンシロチョウ、キチョウ、ヤマトシジミ、コムスジ、イチモンジチョウ、チャバネセセリ、ツマグロヒョウモン、サトキマダラヒカゲ

(澤田 義弘・山田 量崇)

トンボの池ヤゴ調査

2002年7月13日に、貝塚市市民の森内の自然生態園・トンボの池において、アオミドロが大量に発生していたので、清掃をかねてヤゴ調査を行いました。参加人数は36人で、風が強く吹き、時折雨もばらつきましたが、元気に調査しました。調査は、参加者による任意で行いました。以下に結果を示しますが、今回ヤゴはまだまだ成虫になれるような状態ではなく（若齢幼虫といえます）、ほとんど種への同定ができませんでした。同定できなかったものは、「アカネ類」というように示してあります。

調査結果

イトトンボ類 65 個体

ギンヤンマ 69 個体

アカネ類 37 個体

シオカラトンボ 1 個体

合計 172 個体でした。

その他に、アメリカザリガニ（大型24個体、小型5個体）とカゲロウ類1個体、チビゲンゴロウ2個体、ハイイロゲンゴロウ3個体、ヒメガムシ1個体、キベリヒラタガムシ1個体が採集されました。

(澤田 義弘)

満月の夜 海辺探検

2002年7月24日、大阪府立水産試験場の鍋島靖信氏を講師に迎え、潮の満ちつつある満月の夜、二色浜の渚において夜間観察会を今回初めて試みました。夏休みに入ったこともあり、参加者も多く、夕闇迫る浜辺でみんなの表情はわくわくしているようでした。

まず、カニ籠をグループごとに設置場所を決めて仕掛けました。エサはサバの頭を使いました。続いて近木川河口で投網の打ち方を習い、高学年の子どもたちがチャレンジしました。合わせて、チヌ、クサフグ、セイゴ、ボラが捕れました。このとき採れたものの何匹かは館の水槽で飼育することになりました。すっかり日も落ち、浜辺で夕食を取りましたが、闇鍋ならぬ闇弁当となりました。

次にプランクトン採集です。集魚灯に集ってくるプランクトンを、手作りプランクトンネットと既製のものと両方を使って採集しました。目を凝らして見ると、1mm足らずのコペポダと呼ばれるケンミジンコ類や海洋動物の幼生や稚魚がたくさん動いていました。この他にも、ピンク色をしたゴカイの仲間がたくさん集まって来ました。これは漁師さんらが言う「バチが抜けた」現象で、大潮時にゴカイの仲間が生殖のため土中から抜け出して、集まって泳ぐ生殖群泳と呼ば

れる繁殖行動だと思われます。まさか、こんな光景を目にすることになるなんて予想外の収穫でした。この採集したゴカイを大阪市立自然史博物館の山西良平学芸員に同定していただいたところ、アシナガゴカイ *Neanthes succinea* であり、汚濁している海域によく見られるそうです。

行事の最後に、仕掛けておいたカニ籠を引き上げると、いくつかにはイシガニやチチュウカイミドリガニが入っていました。



近木川河口で生殖群泳していた
アシナガゴカイ *Neanthes succinea* (生殖型)

* 生殖型……生殖時期に遊泳のため体型が変化する

(山田 浩二)

満月の夜 海辺探検感想

バケツをそっと傾けて海水を移動させたとき、透明感のあるブルーが底いっぱいに煌めきました。一斉にはないけれど一瞬の、青く煌くさまは神々しいほど、まさしく、子どもの頃若狭の海で見た夜光虫の色でした。「バチが抜けた」現象には、興奮させられました。灯火の下、狂ったように泳ぎ回る無数のゴカイ、それを追うクサフグ、これぞ、満月の夜の饗宴ですね。

階段状になった防波堤に大小さまざまな

イシガニが歩いている。たとえ人間に捕まえられようとも、満月なんだもの……？

(白木 江都子)

千石荘のトンボ

ナニワトンボは元気かな？

比較的涼しく、晴れわたった 2002 年 8 月 3 日、千石荘近辺の牛神池に生息するナニワトンボの観察を行いました。ナニワトンボは日本にしか住まず、水質の悪化により絶滅する危険性がある（準絶滅危惧種と呼ばれる）ため保護されているトンボです。貝塚市ではこの牛神池の他にボタン池などでも記録されています。

今回の観察会では、親子あわせて 24 名が参加しました。まず千石荘病院の入り口で集合した後、千石城跡を通り、牛神池に向かいました。着いてからみんなで池の周りに各自散らばり、ナニワトンボがいるか観察しました。しかし、残念ながら本日の主役には会えずじまいでした。しかし、ナニワトンボと同様、絶滅の恐れがあるネアカヨシヤンマを確認しました。貝塚市の中でも、千石荘近辺でしか確認されていない種です。その後、池の周辺だけでなく、新池の方へも自然観察をしながら散策をして終了となりました。このときに観察されたトンボをはじめ、他に観察された昆虫類を以下に示します。

観察された昆虫類

(トンボ類)ベニイトトンボ、キイトトンボ、アオモンイトトンボ、ネアカヨシヤンマ、ウチワヤンマ、チョウトンボ、ウスバキトンボ、ノシメトンボ、マユタテアカネ、オオシオカ

ラトンボ

(その他の昆虫) コカマキリ、オオカマキリ、ハラビロカマキリ、コクワガタ、カブトムシ、キマワリ、モンシロチョウ、キチョウ、ツマグロヒョウモン、シモフリスズメ

ナニワトンボは遊学館に所蔵標本がありますので、その写真を掲載します。体の色は青く、アカネの仲間です。



ナニワトンボ

(澤田 義弘)

蕎原ハイキング(ほの字の里～東手川)で観察された動植物

2002年8月4日に貝塚市青年会議所との共催で本行事を行ないました。午前10時に蕎原ほの字の里に集合、快晴、参加者は約40名が4班に分かれ、動植物や地層などを観察しながら林道を南へと登り、途中で昼食、午後から東手川筋へ降り、少しの時間、川に入り水生動物を観察、春日橋を経て、近木川沿いにほの字の里まで戻ってきました。その後、ほの字の里の中にある木工作業所で貯金箱を作り、最後に、ハイキングの最中に行なったクイズの優秀解答者に景品が送られました。当日に観察された動物、植物を以下に報告します。

鳥類

キセキレイ、コゲラ、ツバメ、メジロ、ウグイス、ヒヨドリ、スズメ、ハシボソガラス、キジバト(巣)(以上、同定：石毛久美子)

爬虫類

ヤマカガシ、シマヘビ幼蛇、ニホントカゲ、カナヘビ

両生類

トノサマガエル、アマガエル

魚類(東手川)

タカハヤ、カワヨシノボリ、カワムツ

甲殻類(東手川)

サワガニ

貝類(東手川)

カワナナ (以上、同定：山田浩二)

クモ類

アズチグモ

水生昆虫(東手川)

ムカシトンボ幼虫、ミルンヤンマ幼虫、トウゴウカワゲラ属の一種幼虫

(以上、同定：岩崎拓)

昆虫

トンボ目 ウスバキトンボ、オニヤンマ
バッタ目 イボバッタ、ヒナバッタ、セスジササキリモドキ、コロギス(スギの林床でセスジササキリモドキが多数観察された)
カマキリ目 ハラビロカマキリ、コカマキリ
ナナフシ目 エダナナフシ
カメムシ目 アオバハゴロモ、ベッコウハゴロモ、ミンミンゼミ、クマゼミ、アブラゼミ、ニイニイゼミ、ツクツクボウシ、ヒグラシ(+羽化殻)、クサギカメムシ、チャバネアオカメムシ、ヒゲナガサシガメ
ハエ目 シオヤムシヒキ
コウチュウ目 ヤマトオサムシ、マメコガネ、

クロタマムシ、ウバタマムシ、ヒメコブオ
トシブミ、ミヤマクワガタ

チョウ目 アオスジアゲハ、キチョウ、スジ
グロシロチョウ、コムスジ

ハチ目 フタモンベッコウ、セグロアシナガ
バチ、クマバチ

(以上、同定：岩崎拓、宮本泰行)

植物

コナラ (ぶな科)、リョウブ (りょうぶ科)、
スギ (ひのき科)、クリ (ぶな科)、コウゾ (く
わ科)、ガンビ (じんちょうげ科)、モチツツ
ジ (つつじ科)、ウラジロノキ (ばら科)、ホ
ウノキ (もくれん科)、シイ (ぶな科)、ヤマ
ウルシ (うるし科)、タラノキ (うこぎ科)、
ヤマアジサイ (ゆきのした科)、イヌシデ (か
ばのき科)、ウバメガシ (ぶな科)、アカメガ
シワ (とうだいぐさ科)、ヒノキ (ひのき科)、
ヌルデ (うるし科)、イヌビワ (くわ科)、イ
タドリ (たで科)、サルトリイバラ (ゆり科)、
クサイ (いぐさ科)、コシダ (うらじろ科)、
ヨウシュヤマゴボウ (やまごぼう科)、クサ
ギ (くまつづら科)、ムラサキニガナ (きく
科)、クサイチゴ (ばら科)、フユイチゴ (ば
ら科)、ミヤマナルコユリ (ゆり科)、ササク
サ (いね科)、ヤマノイモ (やまのいも科)、
モミジカラスウリ (うり科)、カエデドコロ
(やまのいも科)、ガンクビソウ (きく科)、
ヒヨドリバナ (きく科)、ダイコンソウ (ば
ら科)、コアカソ (いらくさ科)、ミズ (いら
くさ科)、カラムシ (いらくさ科)、ミズヒキ
(たで科)、キンミズヒキ (ばら科)、ウバユ
リ (花) (ゆり科)、オニドコロ (やまのいも
科)、アキノタムラソウ (花) (しそ科)、クル
マバナ (しそ科)、ハエドクソウ (はえどく

そう科)、キツネノマゴ (きつねのまご科)、
コマツナギ (まめ科)

田んぼ

アゼガヤ (いね科)、コゴメガヤツリ (か
やつりぐさ科)、コナギ (みずあおい科)、オ
モダカ (花) (おもだか科)、セリ (せり科)、
ウリカワ (おもだか科)、イヌビエ (いね科)
(岩崎 拓・湯浅 幸子)

夏休みに採集した

生き物の名前を調べよう!

2002 年 8 月 24 日、午後 1 時～4 時まで、
遊学館多目的室で夏休みに採集した動植物
の名前を調べる会が開かれました。毎年、8
月の第 4 土曜日に遊学館で行われている行
事です。今年は合計 7 人と人数が少なく、講
師の先生方も採集に出かける子どもが少な
くなったのか、それとも採集できる場所が少
なくなったのかと心配していました。今回子
どもたちが持って来てくれたのは、植物 1、
化石 1、貝 2、昆虫 2 でした。来年は講師陣
を唸らせるような動植物が持ち込まれれば
いいな、と考えています。

(白木 江都子・澤田 義弘)

自然生態園「トンボの池」

2002 年 8 月 26 日、近ごろの晴天続きでト
ンボの池の水が少なくなったため、臨時で水
足しと清掃をかねてヤゴ調査を行いました。
参加者は 13 人で照りつける太陽の下での大
変な作業となりました。下の貯水タンクから
ポンプを使って上の貯水タンクに水を移し
ました。

同時に繁茂したアオミドロをすくい取り、ヤゴ等を観察しました。

結果は以下のようにになりました。クロスジギンヤンマの終齢幼虫が多数観察されましたが、本種以外のヤゴは若齢幼虫で数も少なく、少し寂しい調査となりました。

調査結果

イトトンボ科

アオモンイトトンボ 8 個体

ヤンマ科

クロスジギンヤンマ 62 個体

ギンヤンマ 2 個体

トンボ科

シオカラトンボ 4 個体

タイリクアカネ 3 個体

他にもハイイロゲンゴロウ、ヒメガムシ、キベリヒラタガムシ、カゲロウ類などの水生昆虫や、アメリカザリガニが多数観察されました。

また今回メダカが多数生息していることが観察されました。このメダカは4月13日のトンボの池調査では全く観察されず、それ以降に何らかの方法でトンボの池に入り込んだものと考えられます。

(学芸員実習生 宮本 泰行)

太刀魚の怪 !?

2002年6月30日、二色パークタウンにお住まいの上田修さんの奥さんが、おいしそう

なタチウオの切り身のフライを片手になぜか、けげんそうな様子で館に来られました。

「スーパーで買ったこのタチウオ、肉の中に何か白いかたまりみたいな異物があって…」と、タチウオがのったお皿を差し出されました。食べたいという邪念を振り払い、ピンセットで肉をほぐすと、小石程度の白いかたまりが確認されました。さらに周辺の肉を取りはずし、よく見ると背骨とつながっており、骨の一部がふくらんだものとわかりました。

そこで、大阪府立水産試験場の鍋島靖信研究員にお問い合わせしたところ、「タチウオにはよくあることです。毎年数回はこれに関する質問があります。骨の造骨細胞から骨組織が異常増殖し、かたまりになります。なぜ骨の一部に異常が起こるのかは、よくわかりません」とのことでした。

さぞかし、大海原では泳ぎづらかったことでしょう。なお、この骨は標本として、館で保管しています。



異常増殖したタチウオの骨

(山田 浩二)

脇浜戎神社のサギ類のコロニー

サギ類は、繁殖期にコロニーという集団で雛を育てる習性があります。遊学館に近い脇浜戎神社では、ゴイサギとコサギの2種類のサギが雛を育てています。

ここでは、昨年まで2つがいのサギ類の繁殖が確認されていましたが、今年の5月下旬から6月にかけて急激に個体数が増加しました。繁殖期の終わりにあたる8月24日に調査をしたところ、ゴイサギが51巣12雛、コサギが9巣9雛、見られました。

しかし、サギのコロニーは鳴き声や糞害が激しく、神社ではクスノキを一部、剪定して、サギ類とどのようにつきあっていくのかを模索しているところです。



ゴイサギの巣 撮影 鈴子佐幸

(石毛 久美子)

自然遊学館だより 2002 秋号(No. 25)

発行日 2002. 10. 1

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 0724(31)8457

Fax. 0724(31)8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.osaka.jp
